

この少人数教育の良さに加え、お茶大の教育環境を支えるもうひとつの要因は、キャンパスが広いことであろう。都心にしてはかなり恵まれた敷地のおかげで、学園内では常に静かな雰囲気が保たれている。しかし、このように広い敷地に恵まれながら、その土地利用は必ずしも有効とは言えないように思う。附属校がかなりの敷地を占めていることは歴史的な経緯もあるから一応措くとしても、大学関係の各建物の配置は余り合理的とは思えないし、かなりの土地が無駄になっているのではないだろうか。これまでは無駄も一種のゆとりとして許される余裕があったろうが、もうその段階は過ぎたように思う。堅固な建物は一旦建てられると簡単に撤去できないから、今後の校舎建設は長期的な土地利用計画の上に行なわれることが望まれる。例えば、図書館西側の空地は建築用地に予定されているようだが、むしろ学生の憩いの庭園として整備したい場所だ。今からそのような広場を作るとしたらこの場所しか無いであろう。

ともあれ、このような環境の中で、前・後期とも先輩各先生方とほぼ同じ時間数の講義、演習を受け持ち、昨秋は長野県白馬村での式先生との合同巡検（3年）に参加した。幸い好天に恵まれ、かなり盛沢山の課題を用意したにも拘らず全学生が意欲的に取り組み、その成果が充実したレポートとなって提出されたこと、さらに何人かの学生のレポートの中に、「白馬村巡検で始めて地理学の難かしさと面白さがわかったように思う」という感想を見つけたことなどの中に、地理学教師としてのささやかな喜びを見出している。（1月15日記）

かくされているデータ

内 藤 博 夫

何かを研究しようとする場合、私たちはデータを収集し、それに基づいて論理を組立てていく。その際、既存のデータが入手できなければ自力でそれを作り出す努力をする。実態調査や実験を行うのはそのためである。しかし自力でデータを作ることは、時間・労力・費用の制約があるから限界をもっている。例えば全国的なデータが必要となった場合は、それを個人の力で作り出すことは事実上不可能である。そこでしばしば利用されるのが国勢調査など、全国をカバーしている官庁統計である。しかし官庁統計に限らず、既成の統計書はそれぞれ独自の方針にもとづいて編集されているから、個々の研究者の必要を常にみたしてくれるわけではない。とりわけ私たちになじみの深い地域統計は地域の数が多くなればなるほど統計書の収容力との関係で項目の数は減少する傾向がある。そのため地域統計で利用できる範囲は全国統計よりも狭められてくる。言いかえれば、地域統計の場合、調査された結果の少なからぬ部分がかくされてしまうのである。考えてみればこれは大変残念なことである。

この他に秘とく数字の問題がある。工業統計表や商業統計表を利用したことのある人ならばxと記されている秘とく数字の処理に悩まされたことが1度や2度はあるだろう。これは事業所数が1ないし2しかない場合に、企業の秘密を守るためにとられた措置である。統計調査の公平さを維持するために必要な措置であるとはいえ、これ、また調査された結果が日の目を見ないという意味で残念なことである。金銭に関する統計だけをかくすのであればまだしも、現行の官庁統計では公表されるのは

事業所数であり、企業秘密とそれほど関係がないと思われる従業者数までかくされている。これはいささか行きすぎであるように思う。それはさておくとして、実在するデータが人為的にかくされていると事実を認めた上で、改善の策として試みられる方法が、かくされているデータを何らかの方法で推定することである。小生がここ2、3年とりくんできたことといえば、未知のデータを推定することであった。不十分なから一定の精度で推定値が得られるようになり、一息ついているのが現状である。

地域統計がもつさまざまな弱点を克服する努力がこれまで全然なかったわけではない。推定方法の開発もその一つであり、総理府統計局が中心となつてはじめられたメッシュ・データの作成もそうした努力のあらわれである。これは「小は大をかねる」ことに着目して、約1 km²の地域メッシュに各種の官庁統計を収録したものである。次の課題はかくされているデータをいかにして利用可能な状態にするかということであろう。これを実現するためには、地域統計の設計と編集の各段階で地域分析に必要な項目が立てられるように、地域統計利用者は発言力を高めていくことが必要である。

武蔵野の山菜

斎藤 功

武蔵野の雑木林は「木はおもに檜のたぐいで冬はことごとく落葉し、春はしたたるばかりの新緑萌えいずるその変化が秩父嶺以東十数里の野いっせいに行なわれて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑陰に紅葉に、さまざまな光景を呈する妙」（国木田独步 武蔵野）といわれるように人の心を和ませるものがある。埼玉県境にあるわが東久留米の宿舍周辺には未だ雑木林が多く残っている。とくに生命の息吹を感じさせる萌黄色の新緑、生ビールのあう緑陰、深山ほどの色彩はないが紅葉、落葉を踏みしめて歩く枯野と陽光等は武蔵野の散策の醍醐味を感じさせる。また、子供との散歩の折々に山菜を採取して帰るのも楽しみの1つである。

昨年、雑木林の芽吹き頃、タラの芽が武蔵野でも採れることを発見した。タラの芽は山菜の王といわれるだけあって、天麩羅にせよ、おひたし、あえものにせよ飲物のつまとして最高であり、春を満喫させる添物である。また、ワラビ、ノビル等もこの季節のものである。ワラビは人の手の加わった後を追いかける雑草であるため、耕地と雑木林の境や武蔵野の原景観といわれる草地状のところにみうけられる。高原や北辺の地のワラビと異り、硬く苦味も強いように感じられるが、その日の収穫物と思うと味わいもひとしおである。ノビルは生でも食べられるが味噌炒めがあう。このほか、タンポポやフキノトウなども見うけられるが、あくぬきの研究が不十分なため、食卓にほとんどのぼることはない。

雑木林のなかのエゴの木が白い清楚な花を一面に咲かせる梅雨時から盛夏にかけての時期は山菜にとっても夏かれ時であろう。カラスノエンドウなどのレリクト・クロップもみられるが未だ試食していない。秋には山グリや野イチゴなどのナットとベリー類も散見されるが、晩秋の山の芋（ジネンジョ）が筆頭にあげられよう。根裁農耕文化圏から最も初期にわが国に伝来したといわれるジネンジョは市